

## サロン 2002&ソシオ成岩スポーツクラブ：スポーツマネージメントセミナー

【日 時】2004年8月12日（木）13：00～

【会 場】愛知県半田市・NARAWA WING（ソシオ成岩スポーツクラブハウス）

【主 催】サロン 2002、NPO法人ソシオ成岩スポーツクラブ

【参加者（会員）】加藤貴之（（株）クレーマージャパン） 加納樹里（中央大学） 榊原孝彦（NPO法人ソシオ成岩スポーツクラブ・マネージングディレクター） 高橋義雄（名古屋大学） 中塚義実（筑波大学附属高校） 中村敬（少年サッカーコーチ） 福西達男（NPO法人ポルベニルカシハラスポーツクラブ） 宮城島清也（NPO法人清水サッカー協会） 山中麻耶（YMCAスポーツ専門学校）

【参加者（未会員）】江崎悟（元三菱電機女子バスケット・コーチ） 小沢誠（静岡市スポーツ振興課指導主事） 九野歩（東京学芸大学大学院） 鈴木舞子（東京学芸大学大学院） 宮坂雄悟（東京学芸大学大学院） 他成岩関係者2名

【報告書作成者】山中麻耶

### <施設見学>

榊原さんに案内をしてもらいながら、下の階から上がっていくという形で施設を見学させていただいた。施設の利用料金は、個人の場合、ビジターが一回700円（子ども300円）ということだった。ただし、成岩のソシオ会員になるとその都度の利用料金は不要ということだった（会費は別掲）。

・**体育館**：いわゆる普通の学校の体育館で、スペース的にはバレーボールコートが2面取れるくらいの十分な広さだった。端にはステージが設けられていた。ステージがなければハンドボールコートも取れるのだが、学校も使用する施設ということでステージを設けることになったようである。

体育館は平日、学校が5時半まで使用している。土日は部活動がなく、子どもたちはスポーツクラブに参加している。部活動は3日間（火水木）行われ、月金は部活動がない。

・**スタジオ**：リースで借りているルームランナーの数も多かったし、とてもきれいでなかなか充実している感じがした。ここは子どもは使わない施設で、授業で体育館を使っているときもここは会員が利用している。

・**更衣室**：勉強会の後に、実際、使わせてもらったが、広くきれいで使いやすかった。なんと言ってもお風呂にも入れるのは、利用者にはうれしいと思った。ロッカーは鍵が要らない暗証番号形式の最新の設備だった。更衣室は、水泳の授業の子どもと会員と一緒に使うこともあるらしい。

・**プール**：更衣室にあるドアから出るとすぐにプールがあった。プールも体育館同様、学校にある普通のものだった。25メートルが6コースくらいの屋外プール。新しく造られた他の施設に比べたらきれいではなかったが、このように、元からある施設をうまく利用して様々なスポーツができる環境を作ることが、総合型スポーツクラブでは大切だと感じた。

・**テニス、フットサルができる人工芝のコート**：ここも広さは十分だったので、多くのスポーツができると思った。テニスコートが3面くらい取れそうだった。屋根はついているが隙間があるため、ボールが外に飛んでいくこともあるとかないとか。

・**研修部屋**：宿泊もできるという畳の部屋だった。入り口はスロープになっていてバリアフリー。お茶

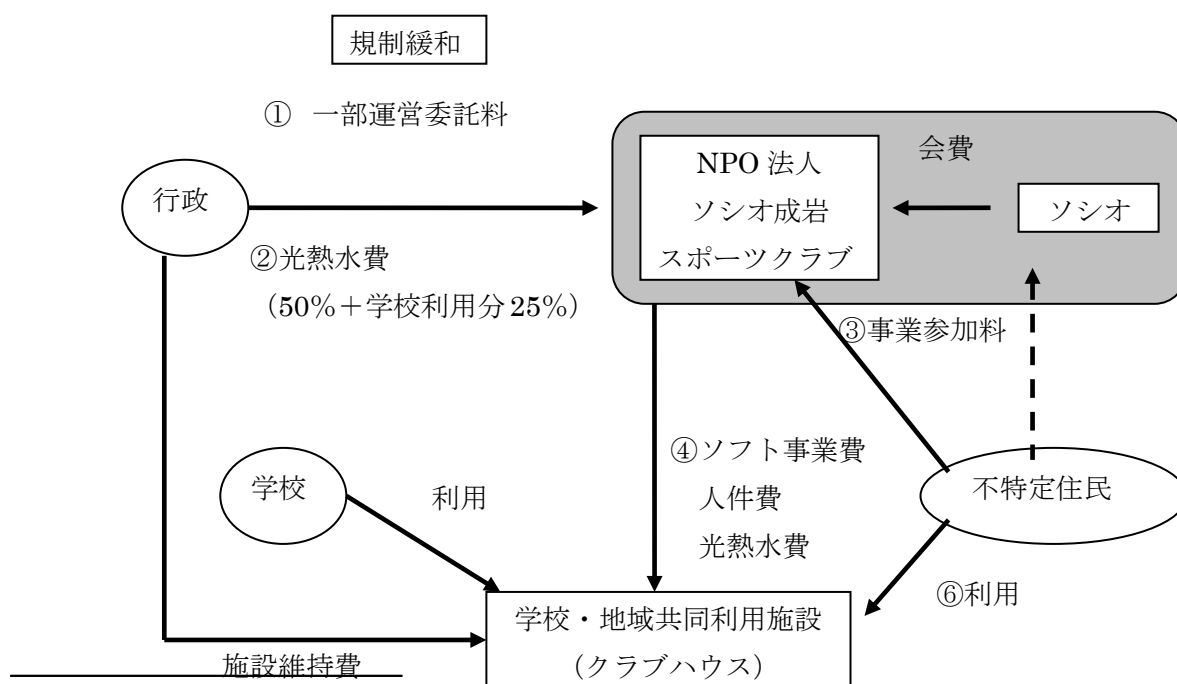
やお花のプログラムも、今後、ここで行う計画も考えているということだった。託児室として使うこともある。

- **喫茶スペース**：コーヒーやお茶が飲み放題だった。アルコール飲料を置くことも考えているらしい。利用している子どもたちを迎えにきた親たちの待ちスペースとしても使われているとのことだった。

大体ほとんどの施設を見せていただいたと思うが、どれもきれいだったし、十分な広さもあり、また民営のスポーツクラブのように贅沢すぎることもなく、地域の方々に気軽に使ってもらえる施設がほぼ完成しているように思った。地域の多くの人々がスポーツを楽しみ、そして一緒に風呂で汗を流し、お茶を飲み会話を楽しむというように、ここがスポーツの場所でありコミュニティの場所になってほしいという期待はとても膨らんだし、他の地域にもこのような施設ができていったら、私たちのスポーツ環境は変わっていくだろうと思った。

## <セミナー1：ソシオ成岩スポーツクラブのマネジメント>

### クラブハウスの公設民営化スキーム（成岩方式）



- ① 清掃業務、保安業務など限定的に業務委託し、委託料を抑制する。
- ② 学校利用分光熱水費は行政が負担する。
- ③ 受託者による経営的運営ができ、
- ④ 施設の有効活用及びソフト事業へのインセンティブとなる。
- ⑤ NPOの活性化と地域づくりが期待できる

資料：特定非営利活動法人ソシオ成岩スポーツクラブ 平成16年度事業計画

#### 1. 事業実施の方針

この法人は、地域コミュニティの核として、多世代、多種目にわたる生涯スポーツ活動及び地域文化の振興などに関する事業を行い、青少年をはじめとする地域住民の心身の健全な育成と、地域社会における教育力の向上を図り、子どもたちを育む明るい豊かな街づくりに寄与することを目的とする。

## 2. 事業実施に関する事項

### (1) 成岩 SC スクール・サークル運営事業

小中学生を対象に 12 種程度のスポーツスクールと、高校生以上の一般を対象にしたスポーツサークルを年間通して運営し、生涯スポーツの研究づくりの推進を図る。

実施予定日：平成 16 年 4 月から平成 17 年 3 月

実施予定場所：半田市成岩地区の学校体育施設及びクラブハウス

従事者の予定人数：65 人

受益対象者の範囲・人数：小学生から高齢者までの不特定多数 年間参加者数延べ 60,000 人

支出予定額：4,500 千円

### (2) WING プロジェクト運営事業

- ・地域住民の健康づくり、スポーツ・文化振興のための各種プログラムを実施する。

実施予定日時：平成 16 年 5 月から平成 17 年 3 月

実施予定場所：クラブハウス

従事者の予定人数：10 人

受益対象者お範囲・人数：成人から高齢者不特定多数 参加者実数約 300 人

支出見込額：4,500 千円

- ・地域のスポーツ振興のため、各種スポーツリーグを実施する。

実施予定日時：平成 16 年 5 月から平成 17 年 3 月

実施予定場所：クラブハウス

従事者の予定人数：5 人

受益対象者お範囲・人数：少年から高齢者不特定多数 参加者実数約 300 人

支出見込額：4,500 千円

- ・主に青少年を対象とした自然体験活動プログラムを実施する。

実施予定日時：平成 16 年 8 月から平成 17 年 3 月

実施予定場所：長野県白馬村及び岐阜県高山市

従事者の予定人数：6 人

受益対象者お範囲・人数：主に小中高校生不特定多数 参加者実数約 250 人

支出見込額：4,500 千円

- ・子育て支援のためのプログラム（トワイライトルーム）を実施する。

実施予定日時：平成 16 年 5 月から平成 17 年 3 月

実施予定場所：クラブハウス

従事者の予定人数：3 人

受益対象者お範囲・人数：幼児から小中学生不特定多数 参加者実数約 60 人

支出見込額：4,500 千円

### (3) クラブハウスの運営事業

半田市からの委託を受け、成岩地区総合型地域スポーツクラブハウスを当法人のクラブハウスとして運営する。

実施予定日時：平成 16 年 4 月 1 日から平成 17 年 3 月 31 日

実施予定場所：クラブハウス

従事者の予定人数：10 人

受益対象者お範囲・人数：不特定多数

支出見込額：13,300 千円

#### (4) 総合型地域スポーツクラブ研究開発事業

文部科学省スポーツ振興基本計画にある総合型地域スポーツクラブの望ましいあり方について、研究及び開発し、関係機関と連携して全国に発信する。

実施予定日時：平成 16 年 5 月から平成 17 年 3 月

実施予定場所：クラブハウスほか

従事者の予定人数：2 人

受益対象者お範囲・人数：不特定多数

支出見込額：100 千円

## <ディスカッション1>

高橋：会員の種類や会費についてはどうなっているのですか？

榎原：以下のようになっています。正会員はソシオ会員になっています。

会員種類	内容	会費	保険
家族ソシオ会員	同居の家族みんなが会員として参加できる	月額 2,000 円	小中学生 500 円/人 高校生以上任意
個人ソシオ会員	小学生以上が会員として参加できる	月額 1,500 円 ただし小中学生 1,000 円	小中学生 500 円/人 高校生以上 1,500 円/人 60 歳以上 800 円/人
スポンサー会員	会員としての活動は出来ない。クラブハウス内にスポンサー名を表示する。	年額 (一口) 50,000 円	必要なし
正会員	ソシオの会員であり 本法人に主旨に賛同して活動することが条件。	年額 10,000 円	

高橋：理事は何人いるのですか？

榎原：正会員の中の 7 人が理事になっています。

小沢：理事になるのに特に審査はあるのですか？

榎原：特になく誰でもなれます。

福西：従業員は何人くらいいるのですか？

榎原：常勤が 2 人居ます。1 人は経理系の仕事をし、もう 1 人は企画などの仕事をしています。また、ボランティアの指導者が 69 人います。ボランティアの指導者にも謝金があり、日本体育協会の資格を持っている人には 2,000 円、半田市の資格を持っている人には 500 円だしています。

小沢：半田市の資格とはどのようなものですか？

高橋：地域スポーツクラブにおいてのスポーツの指導等に関わる人材の養成及びその資質の向上のため

にも資格を出しています。2日で取れます。この資格のメリットとして、半田市の社会体育施設が0円で使えることもあります。

榊原：ウィングプログラムでは会費と別に参加費もかかるようになっていきます。会員であると安く参加できるようにはなっていないです。また、ウィングプログラムではスクールではなくチームを作って参加する1dayフットサルリーグや1dayテニスリーグがあります。フットサルの場合はチーム参加形式と個人参加形式の二つがあります。さらに、専門的な指導者を招き、水中体操教室などのプログラムを行ったりもしています。

中塚：学校以外の指導者が入ることによる問題はないのですか？筑波大学附属高校では、池田小学校の事件以来警備が厳しくなり、外部の人が入りにくくなって来ているのですが。

榊原：逆に地域の人々が多く入ることで、周りの目が沢山あり、犯罪は少なくなるのでは。施設のつくりもなるべくガラス張りにして目が届くようになっています。

福西：成岩では土日の部活動はなく、施設の使用時間も決まっているとのこと。部活のイメージとしては、朝練をして、授業の後に練習をして、土日も試合や練習をやっているというのがあるのですが。

榊原：成岩では部活動は縮小していますが、子どものスポーツ環境は整っています。学校と地域で子どもを見ていこうということではじまったものですが、公立の先生は異動があり、はじめにいた先生はほとんどいなくなってしまいました。スポーツクラブは一步一步発展していますが、よく分かっている教員が居なくなってしまうことが学校では大変でしょう。クラブが発展すればするほど新しく来た先生とのギャップが大きくなります。

中村：私の地元は両国なのですが、50年前くらいだと相撲やお相撲さんと地域住民の距離はとても近かった。例えば、家にお相撲さんがやってきてご飯を一緒に食べたり、相撲部屋に遊びに行ったりなど。しかし今はその距離がとても遠いものになってしまった。相撲自体は大衆スポーツではなく、古典的なものですが、子どもとお相撲さんが遊んだり、怪我しないところで相撲をとったらとても面白いと思います。「両国だったら相撲」のような、地域に根ざしたことを取り上げたい。成岩で昔から盛んだったというような、文化的なものと言えば何でしょうか？

榊原：山車祭りがあります。地区ごとに立派なシンボルとなる山車を持っています。最近また盛んになってきています。

高橋：お祭りとクラブは何か関係はあるのですか？

榊原：あまり関係はないです。

高橋：山車に成岩のシンボルマークをつけてもらうなどできるのですか？

榊原：それはさせてもらえないですよ。

中村：町会が力を持っているということですか？

榊原：お祭りは、お祭りの組織を持っています。だいたい初老（厄年）の人々がお祭りを仕切るようになっていきます。

福西：話が少し戻るのですが、会員の数のことですが、施設ができる前とできた後では急激に変わったのですか？

榊原：急激には変わってないです。この施設ができる前は、年間一世帯で1万円、小中学生のいる家庭は、家族単位で会員になることが義務でした。そういう条件でやっていた時が2600人くらい。現在2250名くらい。会員の意識は格段に上がりました。

福西：施設がないときに、今まで地域でスポーツをやっていた人々が、成岩スポーツクラブになりその会員になるメリットは何だったのですか？

榊原：あまりないですね。特に大人たちには。

福西：それでその人数が集まるのですか？

高橋：おそらく小学校・中学校の部活動をなくして成岩スポーツクラブに切り替えているので、〇〇ちゃんが入ったから私も入るといった感じで、中学校を卒業して退会した人が多かったという事例があります。

榊原：土曜と日曜は部活動がないので、中学生の中で積極的に自分でやることを見つけられない子は、これに入らなければやることがないという感じですかね。

宮城島：地域で限定して半強制的に入ってしまったというイメージでいいのですか？

榊原：強制はしてません。

宮城島：強制はしてないが、なんとなくコミュニティーのまとまりの中で、ここに住んでいるから入るのがいいのかなというような雰囲気なのかな。

榊原：中学生の間ではそういう状況だったでしょうね。

高橋：そのため、中学卒業とともに退会してしまう。

榊原：今年はそうならないように工夫しなくてはならない。高校生になると生活の行動圏が変わってしまう。市内の高校だけではなくあちこちの高校に行ってしまう。

中塚：だいたい成岩の子はどのあたりの高校に行くのですか？

榊原：名古屋の近くあたりなど。名鉄で30分程度のところですよ。

宮城島：清水での出張サロンの時に紹介させてもらいましたが、当時中学でサッカーをやっていた生徒10人のうち、卒業と同時に4人はサッカーをやめていた。6人は高校やクラブユースでサッカーを続けていたが、4人は何処に行ってしまったのかということで、その子達をメインに「U-18」というカテゴリーをつくり、市民体育大会を行うことにした。その大会では、地区ごとにチームをつくって出てくる仕組みにした。8年前は、4人のために無理やり作っているのだから、地区ごとのスポーツのリーダー的存在の子がむりやりメンバーをかき集めてチームを作って来ていたが、ここ2～3年は状況が変わってきた。当時は6割が部活をやっていたのが今は3割くらい。部活をやらない子ども達が増えた。そしたら今度は、子ども達から大会に出たいと言うようになった。組織的に週何回か練習をするのではなく、大会の時期になると集まって1～2回練習して出てくる。そういうようなことをやってみるのも面白いのではないかな。

榊原：フットサルリーグを行っている。

宮城島：そのあたりの取りまとめ役をここのクラブシステムでやり、高校年代の子どもたちや社会人が入ってくると面白いのではないかな。卒業生の3～4割が組織の中に入ってくるといい。

加納：いまの話などは個人的にはとても理解できるのですが、一般の方（大学生）にこういったこととお話すると、はじめに出てくる疑問として、「競技スポーツはこういう状況で育つのか」ということがあります。部活動をなくして行うということでしたが、部活動で朝から晩までやってきたという人々が多い。スポーツを楽しむことはできてもこの環境で強くなるということではできないのかと疑問が多い。そのことに対する明快な答えをすることがなかなかできない。そのところはどうのようにして乗り越えられてきているのでしょうか？

榊原：乗り越えられていないです。良いプレイヤーが育つような環境は作ってあげたいと思っています。残念ながら、地区のボランティアの人々もそうなのですが、自分たちが育ってきた環境をベースに考えるので、どうしてもそこから抜け出せない。ダメとは言えないが、そのような活動のクラブだけではなく、きちんとしたトレーニングして資格をもった指導者に来てもらい、質の高い環境を作って行

きたいということで、今年から「ウィングプロジェクト」を立ち上げてやっていこうとしています。別の事業として考えているということです。

加納：一番理解されない点として、部活動をなくしてしまうことで、楽しいかもしれないがそんなので子ども達は鍛えられるのかということがあるように思うのですが。

中塚：結局スポーツがそのようにしか捉えられていないということですよ。

榊原：でも実際に部活動が子どもを育てることができているのかというとそうでもない。

宮城島：狭い学校や地域という範囲の仕組みの中で、トップアスリートからお楽しみプレイヤーまでを扱うのは難しい。なので、お楽しみプレイヤーは近い地域で面倒をみて、トップアスリートはもう少し広い範囲で面倒をみることにし、トップアスリートとお楽しみプレイヤーの間の風通しをいかに良くするかが課題であると思う。今の状況では、小学校や中学校などの節目でのセレクションをやって、そのあと同じメンバーで入れ替えがないのが問題だと思う。もう一つ問題なのが、地域のチームを支えているボランティアの人の報酬は何かと考えたときに、お金をまずもらっていない。何をもらえるかという、人に誉められることや自分の達成感といったものが報酬となる。その中で一番大きなことが、「勝つこと」になる、チームが勝つことが一番の報酬。また、勝てないとむちゃくちゃに言われてしまうので勝つようにする。そうしているとだんだんおかしくなってしまう。そこでの楽しみ、楽しめるような教え方をすることを誰かが誉めてあげる、評価される仕組みをつくるのが課題であると思う。成岩のスポーツクラブがその役割を果たすことができるのではないのでしょうか。清水の場合では、スポーツ少年団に指導者がいて、父兄や選手（子ども）がいるので、両者しかいないと父兄が文句を指導者に言うと、子どもが使われなくなったりするという面白くない状況が生まれてしまうことがある。ここを切り離して、運営するクラブを作り、何か文句や指導者への要望があったらクラブに言うようにし、クラブでみんなが納得する方針を決めるようにしている。

中塚：成岩でもリーグを事業の一つとして考えているということなので、都内で行っているリーグ戦の紹介と、学校の大きな壁の中で、今どのようなことになっているのかを含めて紹介します。さらに、私自身が学校の部活動で試みていることも、先ほどの宮城島さんの話の流れで紹介します。

## <セミナー2：DUOリーグと新規リーグのマネジメント>

### ■筑波大学附属高校サッカー部の試み

(資料：「“スポーツ”の側から学校運動部を見直そう！」『月刊体育科教育』2001年6月号参照)

筑波大学附属高校サッカー部は面白いつくりになっており、あえて「サッカークラブ」と呼ぶようにしている。まず競技志向の部門である「アスリート部門」がある。これは一般にいうサッカー部で、高体連の大会や、あとから説明するDUOリーグにチームをつくって出場し、「汗と涙と根性」で一所懸命トレーニングをする部門である。「そこまではやりたくないがサッカーをするのが好きだ」と言ってアスリート部門から離れていった生徒が、レジャー志向・プレイ志向の部門を作りたいということで1997年度に始まったのが「フットサル部門」で、2001年度からはコンスタントに部員が入るようになった。学校のルール上、練習は週4日以内となっているが、フットサル部門は週4日もやらず、お楽しみでやっている。さらに「女子部門」が2000年度にでき、場所と人数の関係から、主にフットサルをやっている。この3つの部門がそれぞれ主将、副将を置いて活動している。

クラブ全体としては、週1回「クラブ会」を開き、各部門の報告や、クラブ全体で何ができるのかを話し合い、「お金の動かない事業」を展開している。1998年度から年2回行っている校内フットサル大

会はその一つで、昼休みにグラウンドにフットサルコートをつくり、15分ゲームで、ワールドカップ方式で毎年行っている。男子は約20チーム、女子も約10チーム参加し、校内のフットサルチャンピオンを競う。また、クラブの広報誌をつくり、サッカーやフットサルの普及活動を行っている。2002年のワールドカップの頃は、見るスポーツの普及活動にも盛んに取り組んでいた。大会前は、過去のワールドカップのビデオ上映会を開いて盛り上げたり、大会期間中のチュニジア戦とトルコ戦では、物理実験室でパブリックビューを試みた。一般生徒が200人以上集まって大騒ぎしながら応援していた。そんなことをクラブの活動としてやっている。

### ■東京都サッカー協会主催のU-18フットサル大会

東京都サッカー協会主催のU-18フットサル大会を、毎年夏と冬に、2001年度から行っている。現在はまだ12チームくらいしか出てこないが、昨年8月の大会には、GAROFや府中アスレチッククラブなど、関東フットサルリーグ所属クラブのユースチームや、FC東京U-18、杉並FCユースといったクラブユース、あるいは高校のフットサル部や同好会が参加する中で、筑波大学附属高校からいろいろなチームが出場した。筑附FC・B（筑波大学附属高校のフットサル部門のチーム）・筑波大学附属高校サッカー部（アスリート部門）・筑附FC A（フットサル部門・アスリート部門・女子部門の連合軍）が我々のサッカークラブのチームだが、サッカークラブ員ではないチームも出場した。校内フットサル大会で優勝して、そのまま公式大会にも出場してしまった、2年生のあるクラスのチームである。サッカークラブからの3チームよりもそのチームの方が上位進出したのは、レベル的には悲しい事態であったが、校内の活動がサッカー協会公認大会につながるところがおもしろい。フットサルの柔軟な登録制度のおかげだろうが、同時に、彼ら自身のスポーツ観が、競技志向だけでなく、プレイ志向を容認する風土を育てていることを感じる。

### ■DUOリーグについて

単独の学校単位では解決できない問題を、隣の学校・クラブと協力しながら“地域”という単位で考えていけばうまくいくのではないかということから、地域のリーグ戦を始めた。抱えている問題は多様であり、例えば筑波大学附属高校では、どうすれば引退を阻止することができるか、つまり、どうすれば高校生活の中にバランス良く勉強とサッカーを定着させることができるかであった。そのためには、単発的なトーナメントに向けて試合前に一気に集中練習し、定期試験前に一気に集中勉強するスタイルでなく、日常からトレーニングと勉強をバランスよく行いながら、週末に試合が入るリーグ戦が必要であった。また別の学校では、グラウンドがないことが問題であった。グラウンドはないが部員が沢山おり、熱心な顧問もいる。熱心な顧問は、毎週、知り合いの学校に電話をかけまくり、練習試合を申し込むしかなかった。グラウンド問題は単独校では解決できないが、例えば筑波大学附属高校のグラウンドを他の高校同士の試合でも使うことができるリーグをつくればうまくいくのではないか。

これらいろんな考えを整理して、「DUOリーグの理念」を掲げ、これに賛同する人々がDUOリーグの構成員（DUOクラブ）になることにした。リーグに参加すれば自動的に試合数が確保できるなどといった短絡的な発想はお断りである。

「サッカーをささえる人材の育成—自主運営と受益者負担」を、DUOリーグはとても重視している。DUOリーグでは高校生に審判資格を取らせ、高校生が笛を吹く機会として位置づけている。グラウンドのない学校の生徒の中には、ラインを引いた事がない者もいる。そこでDUOリーグでは、会場校でなく、1試合目のチームがラインを引くことにしている。もちろんきちんと大人が付き添い、指導する。



この場合の大人は、教員に限らず“責任能力のある大人”としている。

## ■DUOリーグのあゆみ

1996年スタートで、始めは10チーム1リーグ制であった。学校の1学期で前期リーグ、2学期で後期リーグが完結し、3学期はオフシーズンと翌年のプレシーズンとしたいと考えた。高体連の試合日程や中間テスト、期末テストの日程も含めてカレンダーをみたところ、9～10週くらいはリーグ戦で使えることがわかった。そこで初年度（1996年度）は、6クラブから10チーム参加で始めた（その後の経験から、8チームリーグだと1学期間で無理なく進められることがわかった）。

昭和一高からは3チームが均等に分かれて参加した（中村氏も高校生として参加していた！）。筑波大学附属高校は3年生中心の筑波Aと1・2年生中心の筑波Bが出た。一番盛り上がったのは両者のダービーマッチである。高体連主催大会には、筑波Aと筑波Bの連合軍がナショナルチームとして参加した。試合結果はDUOリーグ通信で毎回知らせるようにした。結果を即座にフィードバックすることが、リーグ運営には不可欠である。

初年度前期リーグはかなり好評であった。毎回加盟クラブ数も増え、組織としても徐々に整備していった。初年度後期リーグからは大会参加費を徴収するようにした。生徒の中からは、「前期はタダだったのに何で後期からお金がかかるのですか？」や、「高体連の大会はお金がかからないのにDUOリーグは何でかかるのですか？」といった質問があったので、「高体連は学校からお金が出ているのだ」ということや、「こんなところにお金が使われているのだ」ということを説明した。説明を聞いた生徒は、理解はしたが納得しない。生徒たちが最後に納得したのは、「1000円で7試合も楽しめるんやぞ！（初年度は1チームあたり15,000円。1チームの人数が15人とすれば一人1000円。その額でリーグ戦を7試合も楽しめる！）」ということであった。他のレジャーと比べたらはるかに安いという話である。

DUOリーグは、豊島区と文京区の地域限定で行っていた。とは言っても、生徒たちはいろいろな地域から来ている。成岩の事例とはこの点が異なるが、学校施設をベースとし、そこに通ってくる生徒たちを対象者に、定期的に正しいスポーツを経験する場となっている。

「良いものを、より多くの人に提供していこう」という発想から、2000年度末に「東京都ユースリーグをつくろう」というスローガンのもと、東京都全域に広げていく活動を開始した。都内各地区リーグを再編成し、レベルに応じた組織化を底辺から試みた。同じ頃、トップレベルでは「プリンスリーグ」を頂点とする高校生年代のユースリーグのサポートが進んでいった。これには、小石川高校でDUOリーグを一緒にやっていた上野二一氏（現日比谷高校）がJFAの2種（U-18）と3種（U-15）の部会長になり、ユースリーグを全国に広げる役割を果たされたことも大きいと思う。頂点が整備され、底辺のDUOリーグなどが組織され、その間の「都道府県リーグ」をどのように作っていくかということ、まずは仲間うちで、そして2002年度からは（財）東京都サッカー協会の第2種委員会の一つの部署（ユースリーグ準備委員会）として進めることとなった。

## ■U-18 東京都リーグの準備過程

U-18 東京都サッカーリーグは、“全体構造”にあるように2004年度から動く予定であった。1部8チーム、2部8×2ブロック、3部8×4ブロック、ここまでは東京都全域のリーグで、強いチームから順番に割り振っていった。そしてその下に地区リーグ（高体連の地区をベースに分けた）がある。1996年度からやっているDUOリーグは、U-18 東京都第2地区リーグの性格を有することになる。強ければ昇格権を持つが、留まっていたければそのままでもよい。上にいくには競技力と運営能力が評価され

ることとした。2005 年度には、運営組織自体をNPO化し、加盟クラブの代表者が構成員となる組織で進めていくことを考えた。クラブがリーグに加盟し、加盟クラブがチームを出し、クラブ代表者が発言権と決定権を持つという組織をイメージしていた。

### 参考) U-18 東京都サッカーリーグ・大会要項より (「参加資格」について)

加盟クラブは、リーグ戦をしながら「クラブ」を育てていくことを目論んでいた。「参加資格」にはそのことが反映されている。

#### 1) 加盟団体 (加盟クラブ)

東京都に本拠地を置き、(財)日本サッカー協会に加盟または準加盟している団体。具体的には「高体連加盟チーム」「クラブユース連盟加盟チーム」「その他(東京朝鮮、高専、一部の専門学校)のチーム」となる。

年度当初にクラブ単位で「U-18 東京都サッカーリーグ」に加盟する。この場合の「クラブ」は学校単位でもクラブユースでもいい。例えば「筑波大学附属高校」でいい。

#### 2) 参加チーム

加盟クラブは「リーグ戦参加チームの条件」を満たすチームを編成し、リーグ戦に参加する事ができる。人数が多ければ一つのクラブから複数チーム出すことができる。

このように、「理念」に基づき、それに賛同するクラブが仲間になり、リーグ戦を通して、これまでの「チームだけ」に偏っていたスポーツ観から少しずつ脱却していこうと考えた。

こういったことを、2003 年 4 月の「ユースリーグ説明会」でいろいろ説明し、賛同したところがリーグに加盟した。東京都全体で 206 のクラブが加盟申請し、合計約 300 チームで 2004 年度からスタートするはずであった。

ところが、東京都高体連や教育委員会との調整の中で大きな落とし穴があった。

### ■U-18 東京都サッカーリーグ 2004 中止の概要

#### 1. 中止に至った問題点

##### 1) 都立高校教員の服務について

高体連主催でない競技会への参加は服務上どのような取り扱いになるのか。出張で行けるのか、それとも休暇をとって行くのかということ。

##### 2) 会場借用

社会体育団体である(財)東京都サッカー協会が主催する競技会の会場借用についてどのような手続きが必要になるか。学校の施設を利用するための根拠はどこにあるのかということ。

##### 3) (独立行政法人)日本スポーツ振興センター災害共済給付

参加生徒の事故・障害は、日本スポーツ振興センターの災害給付の対象になるか。学校教育活動の一環であれば受けることができるが、このリーグは学校教育の範疇か、それとも社会教育の範疇なのか。学校教育であると校長が判断するための材料はどこにあるのか。

この活動は、学校とは別の、スポーツの側の考えで進めていくべきであり、少しずつ学校から離れていこうと考えていた。育てていくのは地域に根ざした「クラブ」である。加盟単位に「クラブ」という呼称を用いたのはそのためである。もちろん学校として参加してもかまわないが、その場合は、組

織の長である校長の判断が必要となる。校長への説明(説得)は現場の指導者が責任を持って行うこと。それができないところは参加するべきでないと考えていた。

結果的には、都立高校の各校長が判断できないような「あいまいさ」を残したことが「中止」の判断の背景となったのだが、都立高校の特殊な事情に振り回された観があり、また、加盟申請したクラブも本当の趣旨がわかっていなかったところが多くあった(アンケート調査より。現在集計作業中)ことでがっかりした。

2004年度開幕を目指してリーグ日程を組み、会場も一部押さえていたので、予定していた前期分は、「組織的な練習試合」として行った。しかし現在、このリーグ構想はストップしている。2005年度開幕を目指して新たな準備委員会が立ち上げようとしている「U-18 東京都リーグ」は、プリンスリーグにつながるチームを選出するための「強化リーグ」である。明確な理念とビジョンを掲げてユースリーグを組織するのではなく、「とりあえず」つくろうということである。

この事例から考えられることは山ほどあるが、一つは、スポーツの側の理念・考え方を推し進めようとしたときに、これまで黙って支えてくれていた学校のしきたりや考え方とどう折り合いをつけるかである。学校にはスポーツに参加していない生徒もいる。彼らも納得できるだけの平等性・公平性をどう確保し、スポーツの公共性をどう高めていくかが求められるということである。

また、「公認大会」「公式大会」の中に、柔軟な考えをどこまで受け入れるかも重要である。DUOリーグはオーバーエイジも3人まで出場可としているが、こうした遊び心が入らなくなることに危惧の念を抱く。また警告や退場の扱いをどうするか。上から下まで、すべて一律に同じルールをあてはめる必要はないと思うが、人によって温度差が出てくるとまずいこともある。ルールは全てすみずみまで行き渡らなくてはならないと考える人もいる。このあたりが「公認化」という話になった時の非常に大きな問題となる。

## <ディスカッション2>

中塚：この題材も含めながら、「成岩で何ができるのか」について意見交換しましょう。

榊原：中塚先生は高体連のメンバーですね。

中塚：高体連のサッカー専門部にいます。

榊原：先生方がOKと言えれば良いというわけではないのですか？

中塚：東京都高体連の理事会があり、そこがOKを出さなければ進めない。新しいことを始めるときに基本問題検討委員会で議論して何らかの方向性を出す。サッカーの人々はリーグ戦の良さを分かってくれるが、この委員会では陸上やバスケ、あるいはなぎなたなど、各専門部の委員長が出てくるので難しい面がある。

福西：公認をとる必要があったのは、グラウンドの問題と先生の服務の問題なのですか？

中塚：公認化のメリットがどこにあったのだろうかと考えてしまうが、サッカー協会の公認の必要があるとしたら、上から下まで組織として繋げることができるということである。今は、DUOリーグで優勝しても上に上がることはない。どこかの組織がコントロールしてやってあげないと、頭打ちになってしまう。サッカー協会はそういうことを進められる組織である。また、学校が施設を持っているので、教育委員会や高体連の公認をもらえると借りやすい。

実は今、各都道府県でユースリーグの準備が進んでいる。関東でいうと2006年度のプリンスリー

グの出場チームは、2005年度の都道府県リーグの上位チームでやっていくことが決まっており、2005年度中に都県リーグを組織することを目標としている。群馬では、U-17のリーグを前の年にやってそこで優勝したチームが翌年のプリンスチームに参加することになっている。しかしそのやり方ではチームを育てるだけで結局終わってしまう。リーグ戦をやりながらクラブを育てていきたい。そのためにはユース年代に「移籍」の発想がもっと必要になるだろう。例えば、小石川高校に加藤という優秀な選手がいるとする。この選手をDUOリーグに置いておくのはもったいない。1部リーグでやらせたいということであれば、リーグ戦では1部リーグで参加できるように移籍すればいい。高体連主催大会は学校単位なので、小石川高校に戻って出場する。こうしたこととワンセットで考えていた。

強いところが自動的に上に上がっていきけるというのでもない。上に上がればより広い範囲を移動しなくてはならないし、審判のレベルも上がるので審判への謝金も上がる。その負担ができないチームは上に上がらないことも選択できる。

山中：成岩に活かせるかという話ですが、DUOリーグは理念からしっかり立ち上げているのでとても分かりやすいが、成岩の場合、学校と地域で子どもを見ていこうということから始まっているが、学校の先生の異動などで理念が伝わりきっていないように感じる。プログラムも、上を目指す人にはウィングプロジェクトがあり、健康を目指している人にはこんなプログラムがあるということはわかるが、それぞれのプログラムを繋ぐ“理念”を明確に出してもらえるととても分かりやすい。

榊原：施設ができる前までははっきりしていた。理念を唱え、それに賛同する人たちが集まって立ち上げてきた。今までは、部活動の延長・組織的には町内会の延長の形にすぎないものの、ハートだけはしっかり持っていた。しかし組織としてそれではもたなくなってきた。法人化して、今までの活動と、今までやってきていない活動を立ち上げようとしているちょうど過渡期なので、ミッションがぼやけてきているように感じられてしまうのでしょうか。ここで新しい言葉を作ったほうがいいのかもありませんね。いままでは、地域でみんなで見えていこうと言っても、学校の先生と地域のおじさんが指導者という関わりのなかで子どもたちを見ていこうというぐらいのものであったが、これからは施設にみんなが集まって、指導者として子どもを見るというのではなく、この空間で、いろいろな場面を通してふれあいを広げていこうとしている。もう一つは、ソシオとしてこの法人を支えようとする点で繋がっていきこうとしている。それらのことを含めたわかりやすい言葉を持つといいかもしれない。

山中：それなら人の入れ替わりがあっても、一つ目指しているところがあると、理念が浸透していきやすいし分かりやすいと思います。

高橋：行政側の評価指標はあるのですか？例えば、参加人数を増やすとか、トップアスリートを何人育てるや県大会入賞など。そういったプレッシャーもクラブとして一つの目標となりますよね。

榊原：クラブとしては、それはいやですね。理念に乗ったノルマならまだしも…。

高橋：公共の施設を使っているのだから、行政としての評価指標があると思うのですが。

榊原：ないですね。

高橋：指定管理者が入ったとしてもないのですか。成岩の施設よりも上手くできるというところが手を上げて、この施設の管理をやりますといわれることもありえないわけではないですよね。

榊原：将来的にはありえないわけではない。

高橋：そうなってくると、行政側が指標をもって入札をきめるのでは。

榊原：今はそのレベルまでいっていない。ただ、このクラブには随意契約が成り立つ唯一性があると考えている。

福西：いま我々はNPOを名乗っているが、行政からのバックアップがまったくない状態である。成岩スポーツクラブと普通のスポーツクラブとの違いは、受益者負担で自分たちがそのクラブを支えているか支えていないかの違いである。企業がこれをやった場合、自分たちが支えている感覚はほとんどない。NPOでソシオという形でやられている場合、受益者負担でみんなで支えているのだからみんなで努力していこうよという感覚がいたのでは。しかしそういった感覚はまったくなく、やってくれていればいいじゃないかという感じで関わりがあまりない。我々は、いろいろやっている中で、チームをこの地域に根ざしたものにすることや、より多くの人々にスポーツができる機会を与えるようなクラブにしようと頑張っている。今はサッカー1種目であるが、いろいろなスポーツに広げようとしている。また、NPOを立ち上げた理由として、指導者はやればやるほど時間がなくなり、家にも帰れなくなることを解消したいということもあった。組織を立ち上げたからには、クラブの人数を増やしていかななくてはならない。そして人数を増やすために我々が取った手段は、はっきり言ってチームを弱くした。いままでは、全国を目指していた。しかしそれによってつぶれてしまった子もいる。チームを弱くするというよりも、より多くの子ども達にスポーツを楽しんでもらおうとして行った。そうしたことで、1年間で会員も2倍に増えた。また我々のこれからの努力としては、より多くの人々がチームや組織を支えていくための協力を求めることがある。受益者負担をみなさんに植え付けることが大切である。先ほど「勝つ」話があったが、たしかに勝つとみなさんととても協力的になる。現金というわけではなくても、毎試合飲み物を差し入れしてくれるだけでも相当になる。商売でなく子ども達を生かしてあげたいという気持ちや、本当に子ども達にスポーツをさせてあげたいという強い気持ちがあることが大切ではないかと思う。そして成岩のスポーツクラブにいる人々は、スポーツをさせてあげようという人たちが集まっているという感じをうけている。

中塚：修士論文で総合型をテーマにしている学生の方どうですか？

鈴木：行政の評価の部分で、評価基準が「勝敗」にきてしまうということは悲しい。日本のスポーツの価値は勝ち負けしかないのかもしれないが、スポーツに関わる人は、スポーツは勝ち負けだけではないという気持ちが誰にでもあって、それを広めたいと思っていると思う。特に、スポーツを専門にしていない方に対するスポーツの評価となると、一番簡単で分かりやすい勝敗や名声になってしまう。大切なのはそれだけではないということがもっともっと広まり、日本の中でのスポーツの価値がもっと上がってほしいと思う。このことは活動の根本にもあることだが、この問題はどこにいてもまだ解消されておらず、いまその部分を一番訴えていかななくてはならないのではないのでしょうか。

高橋：研究者としてもそこは思うのですが、証明もなく「このクラブは良い」とは言い切れない。経済波及効果など、計算は可能だが、クラブとの関係で少年非行は本当に減ったのかというようなことを科学的に証明しなければならぬと考えている。

宮城島：評価というのはなかなか難しく、ここでの活動の結果がすぐに出るとはかぎらない。スポーツの健康への効果の場合は、実験を行い、これだけのことをやると病気になる確率がどれだけ減るといった結果を出すことはできるが、スポーツそのものの評価というのは非常に難しい。はじめにスポーツの構造を事前に設定しなくてはならない。

鈴木：スポーツを何かに置き換えてしまうのは違うと思う。スポーツを置き換えることは分かりやすいが（例えばスポーツを健康に置き換えて評価するなど）、本当にいま自分がスポーツに携わっているのは健康になりたいからではなく、スポーツをすることが楽しいからである。そのことを表現する言葉や評価する基準もなく、ただのレジャーとして終わってしまいがちな気がするが、決してそれだけで留まることではないという希望をもっている。スポーツをするのは健康のためというのは分かりや

すいが、それだけではない何かを発掘したい。

宮城島：公共のものに投資するには何か理由が必要になってくる。ただ健康や経済効果ということだけでなく、スポーツすることでみんなが気持ち良くなれば良いということでも良いと思う。そのためには投資している人々がそれで良いと納得しなければならない。その努力をしていかなければならない。例えば、今で言えば地区や市で話し合いをしてみんなで納得するようになる必要がある。それをやらないでいると、そこにお金を使うのはどうなのというような人が出てくるしおかしくなってしまう。指標は他の人にもわかりやすく出てくるが、指標で分かりにくい部分はいろいろな仕掛けをつかってみんなが納得できるように努力していく必要がある。

鈴木：そうしていく部分も絶対に必要ということはあるが、成岩の動かない理念を考えた時など、勝敗などではないのではないかと思う。いろいろなセミナーに参加しても、運営者の方々は現実的な問題が大切でそのことに対して議論していることが多いが、そういうのと並行して理念的な部分で、スポーツを何でみんながやっているのかについての話を、同じくらいの割合で聞けたらいいなと思う。

中塚：やり方としては、参加者の声などを集めて、ここに来ることによって「こんなに心豊かになりました」や「沢山の出会いがありました」というようなメッセージを集めてまとめていくということもあるのでは。

榊原：行政が持つ指標と、我々のような考えでクラブを作ろうとして人々の持つ指標は別のものになる場合が多い。健康増進などということは、我々にとっては全く関係のない話になる。税金を使う点で指標を持つことも必要であるが、クラブのミッションを何より優先させたいというのが我々の立場。今後広がるいわゆる指定管理者制度がクラブにとって追い風だと言うのは短絡的だと思う。

行政のつらい部分もよくわかる。一方で施設が出来たときに、我々で運営していき投資していき、その代わりに自分たちの裁量が認められる中で使っていきたいとすると、何でそんなことしなくてはいけぬのか、役所にやらせておけばいいという声はまだ圧倒的である。さみしいがそれが一般的な人々の意識。ただでそういう意識の上で行政が行われている。これが持ちつ持たれつの関係になっている。我々はこの両方から攻められるわけです。

中塚：そのあたり、旧東ドイツに留学されていた加納さんどうですか？ドイツでのクラブや行政と住民の折り合いの付け方など。

加納：簡単に自信をもって答えられるとすると、基本的にスポーツに対する考え方が違う。スポーツに特に携わっていない人でも、こういう場での考え方を理解することができる。スポーツには競技だけでなく、健康などいろいろな関わり方があるというのはもう当たり前前の認識となっている。なので、そこについて特に努力する必要はない。それで、日本で今、若い世代にできるだけいろいろなスポーツへのかかわり方を伝えていきたいと思う。

中塚：スポーツに対する考え方が一つの鍵になってくると思いますね。

最後に榊原さんから今後の夢やたくらんでいることを、話せる範囲でお願いします。

榊原：12月に施設が出来て、委託を受けるというつもりではいたが、仕組みを年度途中から急には変えることができない。会費も1世帯一万円で従来のまま3月までやりくりしなくてはならないし、要員もいなかった。いままでのクラブハウスは学校の空き教室で、半日パートのおばちゃんにいてもらい、実質の活動は土日であった。しかしこの施設は毎日、午前9時から午後9時半まで開けなければならないということが規則で決まっているので、人を置かなくてはならないし、人を置くお金もいる。会費を上げなければならない。上げるとブーイングが起こるだろうが、上げなければクラブは潰れてしまう。ではどのくらいの値上げなら理解してもらえるのか。16年度の行政からの委託料が1月末にで

て、その委託料から逆算して、どのくらいのお金をクラブで作らなければならないのかを考えることができたのが2月に入ってからであった。会員の募集は毎年2月に行っていたのですが、それを引き伸ばすにしても3月の中旬までにはしなくてはならないというようなことで、ばたばただった。2月2日に理事会で決めて、説明する時間もなく会費をホームページでポンと載せたら、本当に大変な大ブーイング。でも、そういう中で初めて、定款はどうなっているかや、会員資格はどこで、誰たちが決めることになっているのか、お金はどう使われているかという意識が高まった。いままでは、地域の人々はそういう意識を持っていなかったのが、これをきっかけに少し意識を持ってもらえるようになった。結果として、私はそれで良かったと思っている。乱暴な言い方だが、中央突破でなければ会費なんて決められなかったと私は思っている。これからもこんなことの繰り返していくのだろうと思う。そういう意味でのかなりの体力が必要。

ビールを置こうという提案も実現には抵抗が大きい。暑い夏に置くと出るので目立ちすぎてしまうのでちょっと涼しくなったところに置いた方がいいと考えている。メンバーボードの取り付けも、こんなもの何でつけたのかという話になると思う。行政もイエスとは言わないだろう。だが、そういうことを一つ一つ問題提起していくことで、意識が高まっていく。本当の意味での市民になっていけるのではないかと考える。今の子ども達が大人になる頃に、成岩の町がジェントルパーソンとふれあいのあふれた町になっていることが夢ですね。そのために、いろんなことたくらんですよ。お楽しみに。

以上